

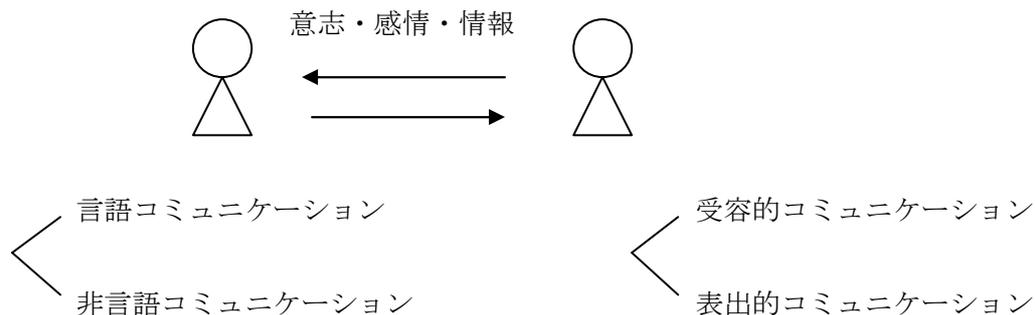
コミュニケーションの育て方

2010/04/11 北陸定例会
藤坂龍司

1. 言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション

<コミュニケーションとは>

意志、感情、その他の情報を相手に伝えたり、相手からの情報を受け取ってそれに反応すること。



受容言語（言われたことを理解する）

受容的非言語（絵カードやサインを理解する）

表出言語（ことばを話す）

表出的非言語（絵カードやサインで意志を伝える）

<絵カードか、ことばか>

自閉症児は一般に聴覚処理より視覚処理が優れているとされ、ことばのない子には手話や絵カードなどの「補助代替コミュニケーション（AAC）」が推奨されることが多い。AACの中では、とくにPECSが普及しつつある。

しかしつみきの会では、ロバース博士（O.I.Lovaas）に倣って、まずことばの獲得に全力を挙げ、ことばの獲得が困難なことが判明した時に、はじめて代替コミュニケーションを用いる方針を取っている。

「ことば」を重視するわけ

AACの限界（持ち運びに不便、伝えられる情報や理解できる相手に限りがある）

ABAでトレーニングすれば、ことばを理解し、話せるようになる自閉症児はもっと多い。

<心か、形か>

ことばを育てようとするとき、よく「ことばを使おうとする気持ちを育てることが大切」と言われる。

しかしABAは心（気持ち）という捉えどころのないものではなく、外部に現れた具体的な行動に着目し、それに働きかけることを特徴とする。

ことばに関しても、ロヴァースなどの古典的ABAは、音声模倣（オウム返し）から教えて、それを意味のあることばにつなげていく。

<インプットかアウトプットか>

絵本の読み聞かせやフラッシュカードなどで、ことばをいくらインプットしても、それだけでは何も学ばない子が多い。

ABAはインプットに頼るのではなく、常に子どもからのアウトプット、つまり行動を引き出し、それを強化する。だから確実に学習させることができる。

<マンドかタクトか>

スキナー博士は言語行動（表出言語）を次のように分類した。

マンド～要求表現

タクト～要求以外の何かについて人に伝える、叙述、報告

エコーイック～オウム返し

イントラバーバル～応答。他人のことばによって引き起こされることばでオウム返し以外のもの

ことばを引き出す方法として、ABA内部でも、エコーとタクトから引き出そうとするロヴァースら古典派ABAと、マンドから引き出そうとする現代派ABAの二派がある。つみきBOOKは前者を取っている。

マンドは動機づけがしやすいが、反面、複数の要求表現を区別することを教えるのがむずかしい。

タクト、例えば物の名前付けなら、同時に二つ以上の物をテーブルに並べて、比較させながらランダムローテーションをするので、区別が教えやすい。

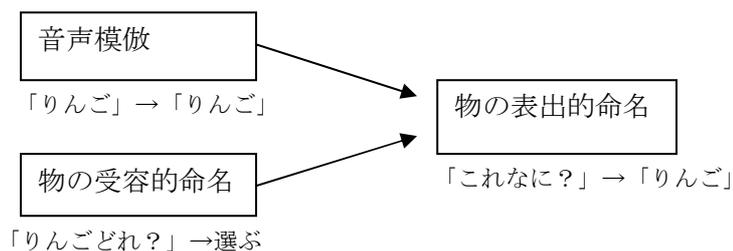
2. ことばを引き出す方法

<無発語の子どもからどうやってことばを引き出すか>

ロバース博士は無発語の子どもにことばを教えるため、まず音声模倣から教える、という方法を取った。最初は意味がわからなくてもいいから、「りんご」と言ったら「りんご」、「バナナ」と言ったら「バナナ」と忠実にまねできるようにするのである。

音声模倣と並行して、物の名前も教える。最初は「りんご」と言ったらりんごを、「バナナ」と言ったらバナナを選べるようにする（受容的命名）。それによって「りんご」という音声とりんごの実物と結びつく。

次に選んだりんごを見せて、「これ何？」と聞き、「りんご」と言えるようにする（表出的命名）。その補助手段（プロンプト）として音声模倣を使う。りんごを見せて、最初はずぐに「りんご」と言ってやる。すると子どもは「りんご」と音声模倣する。音声模倣したら強化する。それを何度も繰り返しておいて、徐々にプロンプトを減らしていく。すると最後には、りんごを見せるだけで「りんご」と言えるようになる。



3. 応答の教え方

(1) 社会的応答

会話の手始めとして、「お名前は?」「何才?」「何組さん?」といった子どもがよく聞かれる質問に、決まった答えを返すことを教える。

<教え方>

①まず子どもの名前を言ってやり、まねさせる。 「たつき」→「たつき」

②次に質問文を導入する。最初は小さく早口で言い、ただちに答えを大きな声で言う。それによって質問文をオウム返しされないようにする。

「お名前は? たつき」→「たつき」

③徐々に質問文を大きな声で言うようにする。と同時に答えを言ってやるプロンプトを徐々にフェーディングする。つまり全部は言わずに一部だけ言うようにする。

「お名前は?た・・・」→「たつき」

④最後にプロンプトを全くなしにする。

「お名前は?」→「たつき」

「ただいま」→「おかえり」、「いってきます」→「いってらっしゃい」、「どうぞ」→「ありがとう」などの社会的応答も同じ方法で教えることができる。

(2) 質問の弁別

「これ何?」／「何色?」、「だれ?」／「どこ?」／「何してる?」など、基本的な質問に対して、その都度適切な答えを返すことを教える。

先ほどの「社会的応答」と違って、同じ質問でもその都度答えが違うので、難度が高い。

<教え方>

①赤いコップを見せて、「これ何?」と聞き、「コップ」と言わせる。

②次に表面を指さして「色は?」と聞き、ただちにプロンプトして「あか」と言わせる。

③この時、二つの質問の違いを強調するため、声の高さやスピードを変えたり、指さしなどの仕草を付け加えたりする。

④「これ何?」と「色は?」の二つをランダムに聞き、10 試行中 9 試行以上正解できるようになるまで、トレーニングを続ける。

⑤基準をクリアしたら、他の物でも練習する。また徐々に質問の違いの強調をなくしていく。

(3) Yes/No

意志の Yes/No 「いちご、いる?」「いる／いない」

事実の Yes/No 「これ、りんご?」「りんご／ちがう」

<教え方(事実の Yes/No) >

①りんごを見せて、「これ、ぞうさん?」と聞き、すぐに「ちがう」と大きい声で言う(プロンプト)。まねしたら、強化。

②徐々にプロンプトをフェーディングして、プロンプトなしで「ちがう」と言えるようにする。

③りんごをみせて、「これ、りんご?」と聞き、すぐに「りんご」と言ってやり、まねさせる。

④この二つをランダムローテーションで練習する。

4. 自発的な話しかけの引き出し方

(1) 叙述の自発

問いかけなくても自分から物の名前を言ったり、状況を言ったりすることを促す。

<教え方>

①テーブルに子どもが名前を知っている物をいくつか並べて、子どものそばにすわる。一番端の物を指さして、子どもにも指ささせる。指さした物の名前の冒頭の音を言ってやり、子どもがその物の名前を言うようプロンプトする。言えたら、続いてその次、またその次と、順に物の名前を言って行くようにプロンプトし、最後まで言えたら強化する。

②絵本を見ながら、自分でそこにあるものの名前を言うように促す。言えたら強化する。

③自分で物の名前を言えたら、なるべく子どもの目を見ながら、笑顔で心から共感のコメントをしてあげる。そうすることで、子どもが「見た物の名前を言いたい。おかあさんに聞いてほしい。おかあさんに『そうだね』と言ってほしい」と思わせるのが目標。

(2) 質問の自発

「これ何?」「どこ?」「だれ?」「どうして?」といった質問を自発することを促す。

<教え方 (これ何?) >

①テーブルにいくつかの物を置いておく。一つだけ、子どもが名前を知らないものにする。

②端から名前を言わせていく。知らない物のところに来たら、「これ何?」と言わせる。言えたら強化する。

③「これ何?」というのが上手になったら、今度は「これ何?」と聞いた時に、その物の名前を教える。そしてその物の名前を覚えることを要求する。同じものについて「これ何?」と聞くのは連続2回を限度とし、2回も名前を教えてもらったら、三回目はそれを覚えていて、「これ何?」と言う代わりにその物の名前を言うことを要求する。

5. 会話の構築

(1) 情報交換型応答

「ぼくはりんごがすきだよ」→「ぼくはバナナがすきだよ」

(2) 適切な質問をはさむ

「きのう、スーパーに行ったよ」「何を買ったの?」

(3) 相づち+感想コメント

「きのう、回転寿司に行って来たんだよ」「へえ、いいなあ。ぼくもたべたい」

(4) これらの応答のミックス練習

(5) 会話の切り出し

質問型 「ねえ、何してんの?」

コメント型 「この服、かわいいね」

情報提供型 「ねえ、こないだぼく、のぞみに乗ったんだよ」

6. 日常生活での働きかけのポイント

(1) ことばの自発を促すために

☆ことばによる要求はできるだけ、すぐになえる

☆あんまり聞きすぎない。相手のセリフを言って、まねさせて強化。徐々にプロンプトを減らす。

☆嘘を強化しない。悪いことでも、本人が正直に言ったら強化。

(2) ことばの理解を促すために

☆むやみに話しかけない。聞きすぎない。

☆その代わり、もし指示を出したら、必ず実行させる。質問なら必ず答えさせる。

☆そのために、指示や質問に反応がなかったら、子どもがいまやっている活動を制止して、もう一度指示や質問をし、適切な行動をプロンプトして強化する。